

『クリスタベル』研究
経験と救済をもたらす Geraldine

堂野 真楠

はじめに

Samuel Taylor Coleridge の三大幻想詩のうち、‘Christabel’は他の二作、*The Rime of the Ancient Mariner*、‘Kubla Khan’と較べると、未完であることから、作品の評価は曖昧な印象を受ける。そこで、本論文では、『クリスタベル』の登場人物、Christabel と Geraldine、そして、Leoline に焦点を絞り、想定されていた続きと削除された箇所、そして同じ驚異の年(annus mirabilis)に書かれた『古老の舟乗り』との比較を行い、考察する。

Geraldine 考察

『クリスタベル』は他の幻想詩とは毛並みが異なる。それはメインの登場人物が女性という点である。これは、他が男性を主人公格とするのに対する最大の相違点である。更に『古老の舟乗り』が海洋を、「クブラ・カーン」が肥沃な土地と洞窟から続く河川の自然を描写しているのに対して、『クリスタベル』では自然描写はあるものの、むしろ登場人物の心理描写に重きを置いている。よって、考察する上で、女性が主軸であること、そして、人物の接触という点に注目したい。そこで、まずは Christabel と Geraldine の両者を考えてみる。

『クリスタベル』は題名こそヒロインの Christabel であるが、作中での動きは Geraldine が中心である。そして、彼女は超自然的な存在として描かれている。例えば、森に置き去りにされた彼女を Christabel が保護する際、城門で不調を訴える場面 (127-134)。西洋の言い伝えによると、悪霊や吸血鬼は家主の仲介なしに、他人の家に入れないとある。¹ 続いて、Geraldine が、聖母マリアへの祈りを嫌がる点 (139-142)、“mastiff bitch”がうなり声を上げる場面 (147-151)、消えかかっていたかがり火が再燃する所など (156-159)。彼女が怪しげな存在として描かれている箇所は多く、Geraldine を邪悪な超自然的存在と考えても不自然ではない。実際 Coleridge の介護を行い、詩人の伝記を書いた James Gillman 医師は Geraldine を“the power of evil”「邪悪な力」と指摘し²、また、彼女を John Keats の *Lamia* (『レイミア』) に登場する魔女と比較している研究もある。³ 従って、『クリスタベル』は魔女 Geraldine が Christabel 親子に害をなす物語と解釈することも可能である。事実 Gillman の伝記によると、この話の結びは、一度姿を消した Geraldine が Christabel の意中の騎士に変身し、再び現れ、不本意な結婚を行おうとする。しかし、本物の騎士が戻ってきて、愛の印である指輪を見せて、その力によって、魔女 Geraldine は消失するという筋の予定だったそうだ。⁴ だが、その展開では中世の騎士道物語を焼き直した印象が強い。新しい解釈を得る為に今度は Christabel を考える。

Christabel 考察

Christabel は貴族の娘という社会的身分の高い人物である。また、遠征中の騎士を思うところ (27-30) や初対面の Geraldine を保護するなど (104-111)、その性格は優しく、

基本的にその善性が強調されている。その他、中世のカトリックを思わせる聖母マリアへの祈りなど（69-70）、キリスト教の要素もある。これらの点は **Geraldine** とは対照的で、徐々に本性を見せ始めた彼女が **Christabel** 親子の仲を裂く展開は、ゴシック・ロマンスの流れを汲んでいる。そこで、私はこの純粹で善なる **Christabel** が邪悪な **Geraldine** によって侵略されるという従来の解釈とは別の解釈を考えてみたい。というのは、**Christabel** が本当に純真で聖なる人物か疑わしいからである。冒頭、彼女は単身森の中で、騎士へ思いを捧げている。確かにこの行動には優しさや健気さが見て取れる。しかし、冷静に見れば、貴族であるならば、城の中に祈りを捧げる場所があるかもしれないのに、衰弱している父 **Leoline** をよそに、城を抜け出す行為は異常である。これは、**Gillman** も指摘している。⁵ また、**Geraldine** を保護する際、寝ている父を起こさずに屋敷の中に入るという **Christabel** の提案（115-122）は、外部の人間を独断で家庭内へ導くという大胆な言動であり、加えて、同衾の誘いまでしている。また大門に差し掛かった際に、鍵を持ち出し、それを彼女自ら開ける行為（123-126）には象徴的なものを感じる。よって、婚約可能な年齢に達している **Christabel** には父親の庇護から脱したいという願望があると考えられる。以上の事は由良君美の『クリスタベル』研究でも **Christabel** による誘惑だと指摘されている。⁶ つまり、**Christabel** は純真無垢な人物ではなく、従来の自分から、変化を求めていると考えられる。

Christabel と Geraldine

次は **Christabel** と **Geraldine** の共通点を考えたい。最大の共通点は、貴族の身であることだろう。続いて、表現されている語彙こそ異なるものの、その容姿の美しさが挙げられる。⁷ その他、彼女たちの父親は旧友の関係である（403-407）。以上のように、両者の人物像や境遇は共通することが多く、キャラクターの性質は非常に似通っている。そこで、私は『クリスタベル』における両者の関係には、聖と邪が真っ向から対立するのではなく、その根底には並列する人物像がある。つまり、彼女たちはそのキャラクター性で近似している上で、差異がある人物像なのである。そして、その差が『クリスタベル』では対比されている。

Geraldine と *Ancient Mariner*

『クリスタベル』の代表的な先行研究である *The Road to Tryermaine* では、以下のような指摘がなされている。⁸

“The sufferings of Christabel were to have been represented as vicarious, endured for her ‘lover far away;’ and Geraldine, no witch or goblin, or malignant being of any kind, but a spirit, executing her appointed task with the best good will, as she herself says:—

All they, who live in the upper sky,
Do love you, holy Christabel, &c.”

Moreover, it will be remembered that Geraldine reminds the spirit of Christabel's mother that she has been delegated special power for the time of her mission. Lastly, it is even possible to explain Geraldine's past on the “probationary” basis. Whatever she is or has done, she is now suffering in expiation of her sin, the brand or symbol of which is still visible on her body (recall here the use of the expiation motif in the doctrine of metempsychosis), and her future depends on the successful accomplishment of her repugnant duty.

(Nethercot, p.206)

ここで、Nethercot は Geraldine を魔女ではなく、善意を持った存在であり、自分の使命を果たすことを悲願とする存在だとしている。Geraldine の超自然的な性格が魔女ではなく、妖精だと考えられているのは興味深い。というのは、Geraldine が魔女で、単純に Christabel に害を与えるのが目的ならば、すぐにその毒牙にかける方が効率はいいはずである。しかし、作中ではそのようなことはしない。また、Nethercot の指摘する Geraldine の特別な力も思い出される。

O mother dear! that thou wert here!
I would, said Geraldine, she were!
But soon with altered voice, said she—
‘Off, wandering mother! Peak and pine!
I have power to bid thee flee.’
(ll.202-206)

‘Off, woman, off! this hour is mine—
Though thou her guardian spirit be,
Off, woman, off! ’tis given to me.’
(ll.211-213)

以上の場面は一見、邪悪な彼女が Christabel の守護霊を追い払おうとしているように読める。だが、“’tis given to me.” 「時は与えられた」という言葉には、Geraldine の強い意志を感じる。そこから、こうは考えられないだろうか。つまり、Geraldine は Christabel に対して何かを伝える役目を持っている、と。無論、この Geraldine の曖昧な言動こそが彼女の“daemonic nature” 「悪魔のような性質」だという指摘もある。⁹ だが、ここで比較したいのが、同じく幻想詩の『古老の舟乗り』の老水夫である。彼は身の毛もよだつ航海の話述べた後でこう語る。

Since then, at an uncertain hour,
That agony returns;
And till my ghastly tale is told,
This heart within me burns.

I pass, like night, from land to land;
I have strange power of speech;
That moment that his face I see,
I know the man that must hear me:
To him my tale I teach.
(*The Ancient Mariner* ll.582-590)

ここで、老人は自分の体験談を話すまでは、気持ちが燃え盛り、またその言葉には、“strange power” 「不思議な力」があると語っている。勿論、直接 Geraldine の台詞と関係あるとはいえない。だが、彼女の“I have power to bid thee flee.” 「消えろと命じる力がある」と“ ’tis given to me.” 「(時は) 私に与えられた」には、老水夫の行動に通じるものがある。両者とも他者を拘束し、何かしらを見せる（もしくは聞かせる）という構図である。この図式は、『クリスタベル』の第一部と『古老の舟乗り』が“Annus Mirabilis” 「驚異の年」のほぼ同時期に創作されていることから、共通した可能性がある。そう考えると、Geraldine は邪悪な存在ではなく、古老と同じ、メッセージを伝える、使徒的な存在としてとらえる事もできる。更に Nethercot も引用した通り、

‘All they, who live in the upper sky,
Do love you, holy Christabel!
And you love them, and for their sake
(ll.227-229)

天上に住むものが Christabel を愛し、そして彼女もまた彼らを愛していると Geraldine は述べている。そして以下は、古老が終盤に若者たちに語った箇所であるが、

He prayeth well, who loveth well
Both man and bird and beast.
He prayeth best, who loveth best
All things both great and small;
For the dear God who loveth us,
He made and loveth all.
(*The Ancient Mariner* ll.612-617)

多少表現は異なるが、地上と天上間の愛の応酬について言及している。以上のことから、Geraldine と古老には共通点があるとしたい。

続いて、Geraldine の身体描写を考える。彼女たちが脱衣し、添い寝をする場面(233-278)は『クリスタベル』の女性的な要素を如実に表している。だが、その扇情的な描写にとらわれずに注意深く読んでみたい。

Her silken robe, and inner vest,

Dropt to her feet, and full in view,
Behold! her bosom and half her side—
A sight to dream of, not to tell!
O shield her! shield sweet Christabel!
(ll.250-254)

この場面で、Geraldine は肉体の面でも、人間ではないことが示唆されており、彼女が怪物だという印象が強くなる。だが、ここまで接近し、自らの肉体を見せておきながら、結局 Geraldine は物理的な危害を加えようとはしなかった。更にこれに続く箇所では、

Yet Geraldine nor speaks nor stirs;
Ah! what a stricken look was hers!
Deep from within she seems half-way
To lift some weight with sick assay,
And eyes the maid and seeks delay;
Then suddenly as one defied
Collects herself in scorn and pride,
And lay down by the maiden's side!—
And in her arms the maid she took,
 Ah wel-a-day!
And with low voice and doleful look
These words did say:
In the touch of this bosom there worketh a spell,
Which is lord of thy utterance, Christabel!
Thou knowest to-night, and wilt know to-morrow
This mark of my shame, this seal of my sorrow;
(ll.255-270)

俎板の鯉の Christabel に対して、Geraldine の躊躇い、むしろ、断腸の思いすら感じられる。そして、Geraldine の行動も、“In the touch of this bosom there worketh a spell, Which is lord of thy utterance, Christabel!”という「発言を支配する呪縛」のみであり、Christabel へ直接的な暴力はない。そして、この呪縛を『古老の舟乗り』の以下の描写と比較してみたい。

He holds him with his glittering eye—
The Wedding-Guest stood still,
And listens like a three years' child:
The Mariner hath his will.
(ll.13-16)

老人の“glittering eye”「きらめく眼光」と Geraldine の呪縛は、他人を拘束する点で共通する。『古老の舟乗り』では、苦難の航海を経て、老水夫が他者に話を聞かせるという使命とそれを実行する力を持っていたが、Geraldine にも同様の力があるのではないだろうか。

それから、彼女の“*This mark of my shame, this seal of my sorrow;*”「私の恥の跡と悲しみの印」と“*Behold! her bosom and half her side— A sight to dream of, not to tell!*”「見よ！ジュラルダインの露になった胸とわき腹を一 夢に見ても、口には出せない！」という部分、原稿の段階ではこの間に“*Are lean and old and foul of hue*”「やせて年老いて、汚い色をしていた」という一行が存在していた。¹⁰ 削除された理由はこの行がなくとも、その後の展開を読者に想像させるには十分だと判断されたからである。実際に Byron がこれらの箇所を暗誦した際、P.B.Shelley は胸部に大きな目玉が付いている妖怪を想像し、驚愕したという。¹¹ この描写の技巧には Coleridge の手腕が発揮されている。そして、私はこの「恥の跡と悲しみの印」が削除された「やせて年老い、汚い色をしていた」に対応していると考えたい。それは、先ほど述べた通り、Christabel と Geraldine は対立する人物像ではなく、その根底は並列する人物像があり、Geraldine はそこから派生した存在だと考えられるからだ。元は Christabel と同水準の美しさや境遇にいながら、年数を経ることで劣化した肉体、そして経験を経た上での悲しみが身体に浮かび上がっている。つまり、これらの描写は、異形の肉体による恐怖ではなく、無垢の状態から経験を重ねた人間の悲哀を象徴していると考えたい。これが、Christabel と Geraldine の差異である。そして、この「恥と悲しみ」は表現こそ露骨だが、決してネガティブなものではなく、生きていく上で無視できない、無垢から経験に至る必要性の象徴を描写している。超自然的な存在でありながら、物理的に干渉ができる Geraldine は、守護霊だが、物言わぬ存在である母親の霊に代わり、我が身をさらすことでその経験を伝えようとしたと考えられる。また、前述の通り、Christabel の言動からは従来自分から変化したい願望が見て取れる。つまり、Geraldine が登場する下地は序盤から準備されていたのだ。

ここで、Geraldine を『古老の舟乗り』に登場する超自然的な存在と比較してみたい。それは、第三部で幽霊船に搭乗している死神の伴侶である。

Her lips were red, her looks were free,
Her locks were yellow as gold:
Her skin was as white as leprosy,
The Night-mare Life-in-Death was she,
Who thicks man's blood with cold.
The naked hulk alongside came,
And the twain were casting dice;
'The game is done! I've won! I've won!'
Quoth she, and whistles thrice.
(ll.190-198)

死神の伴侶の身体的特徴は Geraldine のそれと全く同一ではないが、女性の身体に“leprosy”「らい病」という、皮膚に外見的な害があるという点で共通する。それから、彼女と死神は、欄外解説が説明している通り、船乗員の生命をかけてサイコロを振る遊戯を

している。そして、魔女が勝利し、老水夫の権利を手に入れている。その後、古老以外の者は絶命する（216-219）。この経緯は単純に読めば、恐怖の場面である。しかし、冷静にこの続きと照らし合わせてみると、古老はこの魔女に命の権利を握られたからこそ、ここで命を奪われず、その後に現れる海蛇の群れを祝福し、あほうどりを殺した罪を浄化されている。つまり、“Life-in-Death”「死中の生」と表現される魔女は、老水夫を生存させることで、彼に贖罪の時間を与えたとも言える。“Life-in-Death”の字面からは、生き地獄のような印象を受けるが、このように辛くても生きて行くことを後押しする、ポジティブな見方もできないだろうか。Coleridge が描く幽霊船や死神という恐怖のイメージを持った超自然的存在は決してその外見が示すような攻撃的なものではなく、生存の肯定や救済を与える存在である。そして、『古老の舟乗り』第三部の終わりの欄外解説にはこうある。

But Life-in-Death beings her work on the ancient Mariner.^{1 2}

古老は、“Life-in-Death”の影響を受けている。『クリスタベル』では、Geraldine が “Life-in-Death”と浄化後の古老と似た役割を果たしている。

『クリスタベル』第二部 Leoline と Geraldine

『クリスタベル』第二部の創作は第一部から年数が経過している為、作風の印象は異なる。特に Christabel の父親の存在が大きい。Sir Leoline の登場によって、第一部での Christabel と Geraldine という限定された交渉から相關図のように変化している。それでは、Geraldine が周囲にどのような影響を与えているかを考察していきたい。

先程までの考察で Geraldine は魔女ではなく、Christabel に経験や救済を伝えて行く存在だと考えたが、それは、父 Leoline にも及んでいる。では、その根拠を順に考えてみたい。最初に第二部の冒頭、Leoline は自分の妻が亡くなったことをきっかけに朝に鐘を鳴らすことを習慣としている。これらの場面は暗く、具体的な地名が羅列されており、読み手に厳粛な鐘の音が広範囲に及ぶ様子を想像させる。また、“Three sinful sextons’ ghosts are pent”「三人の罪深い寺男の魂が閉じ込められている」（353）や“The devil mocks the doleful tale”「悪魔はその憂鬱な物語を嘲る」（358）といった死や悪魔を連想させる描写が更に暗い印象を演出している。これは、第一部とは反対に第二部が朝を背景にしているにもかかわらず、それを覆すような描き方である。つまり、それだけ、Christabel の家庭環境は母親の死去、老いた Leoline、騎士の不在によって、陰鬱な状態であったことを物語っている。だが、そのような環境の中、Leoline は Geraldine と面会し、旧友の娘だと知ると、一度は青さめるが、過去を回想し、Geraldine にかつての知己の面影を見る。そして、彼女の身の上の話を知ると、Leoline の様子は以下のように変わる。

O then the Baron forgot his age,
His noble heart swelled high with rage;
(ll.431-432)

He spake: his eye in lightning rolls!
(444)

第一部で Leoline が熟睡することはないとあったので、その健康状態が良好ではないことは想像できる。だが、Geraldine と接触したことで、彼は年甲斐もなく興奮している。無論、この後の描写で Christabel が父親と Geraldine の抱擁に不吉なものを感じているが、Leoline に限定して見れば、老齢の彼に若かりし頃の気力が復活している。更に以下の箇所では、

And by mine honour! I will say,
That I repent me of the day
When I spake words of fierce disdain
To Roland de Vaux of Tryermaine!—
—For since that evil hour hath flown,
Many a summer's sun hath shone;
Yet ne'er found I a friend again
Like Roland de Vaux of Tryermaine.'
(ll.511-518)

詩人 Bracy を通して、Leoline の積年の後悔、そして、親友 Roland への賛辞を投げかけている。この追真の Leoline の思いは Geraldine がいたからこそ吐露できたのであろう。親友と袂を分かち、妻に先立たれ、自身の健康すらままならない男に、これだけの気力を呼び戻した Geraldine の存在は驚異である。Leoline と Geraldine の関係には、一種の救済や浄化が見られる。実際、Leoline から見た Geraldine は、“a thing divine”「神聖な人物」(476)であり、“bright eyes divine”(595)「輝く神聖な瞳」をしている。Nethercote は Geraldine は使命を帯びた精霊だとしたが、その使命の一つは Leoline の救済にあるとも考えられる。そうすると、彼女が旧友の娘を名乗ったのは、計画的であり、効果的でもある。彼女は、“Life-in-Death”と同じように救済を施す存在ではないだろうか。

蛇と鳩が象徴するもの

第二部で Geraldine と Leoline に限定して見れば、そこには救済が見取れた。しかし、第二部には、Geraldine=魔女説の根拠として挙げられる箇所が散見するのも事実である。その中でも、Bracy が見た夢が顕著である。その夢では、Christabel の名で呼ばれる鳩が森の緑の中でもがいており、それを不憫に思い、鳩を持ちあげてみると、そこには輝く緑の蛇が鳩の羽と首に絡みついていたという(527-555)。この描写は、文字通り、鳩は

Christabel を、蛇は Geraldine を意味している。平和・純潔を象徴する“dove”に“snake”が巻きついているのは、Christabel への侵略を暗喩している。（同時に第一部の彼女たちの添い寝の場面も思い出される。）そして、蛇と鳩について、特に以下の描写では、

Close by the dove's its head it crouched,
And with the dove it heaves and stirs,
Swelling its neck as she swelled hers!
(ll.552-554)

性的な交渉と見る指摘もあり¹³、Christabel への侵略を試みる Geraldine の魔性を主張するには十分な根拠である。

一方で『クリスタベル』の世界は Christabel と父親との暮らしであり、生命を生み出す母親の存在は既がない。その為か、父 Leoline の家父長的な要素は随所に見られる。その顕著な例が以下である。

Save the boss of the shield of Sir Leoline tall,
Which hung in a murky old niche in the wall.
(ll.162-163)

この二行には父 Leoline の守護が象徴されている。古くて暗い場所にもかかわらず、Christabel がこの盾を言及するのは、彼女が父親の庇護を意識しているからである。このように、『クリスタベル』の物語には、徹底した生命の枯渇、そして、老いた父親の監視という、生産性のない世界が描かれている。だが、Christabel には婚約している騎士がいて、また父親の庇護から脱したいと思われる行動も見受けられ、生存や未来といった萌芽も見られる。そうすると、Bracy が見た夢は、その道德性は別として、その交わるイメージから、Christabel の純潔を引き換えにした、新たな生命の誕生、つまり彼女の生殖行為と子孫の繁栄をイメージすることもできるであろう。

Christabel と Leoline の無垢と経験

『クリスタベル』の物語は生命が枯渇した世界であるのと同時に、父 Leoline の娘への愛情の苦悩も描かれている。それは、父親と Geraldine が親しくなっていく様子を、不吉なものを感じた Christabel が彼女を送り返すように言う場面（616-617）。これを聞いた Leoline は彼女の言動を娘の嫉妬心によるものと思い、立腹する（640-647）。これらの場面には、妻との忘れ形見である Christabel から進言されたこと。そして、旧友の娘の前だということが絡み合い、葛藤となっている。特に Geraldine と面会し、気力が回復した Leoline にとって、Christabel の言葉は衝撃であったのだろう。それは、第二部の結びにて以下のように示されている。

A little child, a limber elf,
Singing, dancing to itself,
A fairly thing with red round cheeks,
That always finds, and never seeks,
Makes such a vision to the sight
As fills a father's eyes with light:
And pleasures flow in so thick and fast
Upon his heart, that he at last
Must needs express his love's excess
With words of unmeant bitterness.
(ll.656-665)

可愛い娘は父親の情を満たし、その為自分も心にもない言葉で愛情を表現するしかないといふ。かわいさ余って憎さが百倍といったところか。このように Leoline の Christabel に対する愛情は娘への普遍的な愛情であるのと同時に、無垢なる故に過剰な愛情とも言える。それが、Leoline の家父長的な要素や盲目的な庇護の原動力なのであろう。だが、騎士と Christabel の結婚によって、Leoline の家系にはやがて新たな生命が訪れる。その為には、Leoline は自身の愛情に分別を持たなければならないし、Christabel も父親離れをしなければならない。これは、Christabel 親子にとって、避けては通れない道であり、父親の庇護という「無垢」の状態から脱却するのに必要な「経験」である。

Geraldine の悪性の必要性

以上の考察から Geraldine とは Christabel 親子に救済と経験を促すことを目的とする、超自然的な存在だと私は考える。そして、彼女が一見すると、魔女に思われがちなのは、Gillman が記した結末予定にある通り、倒される存在としての役割が必要だからである。というのは、仮に Geraldine を天使のように描き、優しく Christabel 親子を救済し、導くという筋にした場合、彼らは自身の経験を常に天使 Geraldine によって施されたという被贈与者の感覚でとらえることになる。つまりその場合、彼らの「経験」は飽くまでも与えられたものに過ぎず、自らが能動的に行った「経験」ではなくなる。そこで、Geraldine に魔女的な要素を持たし、Christabel 親子が変わる契機を外的な要因で急進的なものとし、そして、当事者たちによって Geraldine が消失させられるという話にすることで、彼らの経験は初めてその永遠性を保つことができる。よって、Geraldine の魔女的性格の必要性を以上のように説明したい。だが、様々な事情により、未完となったことが、Geraldine の曖昧性を更に印象付けている。そして、決定的な解釈を出させない代わりに、いつまでも読み手を悩ましながらも楽しませるものに仕上げている。それこそが、幻想詩『クリスタベル』の文字通り魔的な点だと言えよう。

Notes

*本稿は平成23年度学習院大学英文学会大会での口頭発表原稿に加筆修正を施したものである。

*本稿の『クリスタベル』と『古老の舟乗り』は Jackson, H.J. ed. *Samuel Taylor Coleridge: The Major Works including Biographia Literaria*. New York: Oxford, 1985. をテキストとしている。詩の引用該当部分は括弧内に行数で、欄外解説はページ数で表す。

1 S.T. COLERIDGE 齋藤勇注釈『研究社小英文叢書(14) CHRISTABEL』研究社1930年のp.44に説明がある。また Walter Scott の *The Abbot*, Chap. xv, ad fin and his Note VIII や Goethe の詩にも同様のことが書かれていると指摘されている。

2 James Gillman, *The Life of Samuel Taylor Coleridge* (London, 1838) の p.283.

3 Arthur H. Nethercot, *The Road to Tryermaine: A Study of the History, Background, and Purposes of Coleridge's "Christabel."* New York: Russell & Russell, 1962. の p.106.

4 Gillman, *Life*, pp.301-pp.302

5 Gillman, *Life*, p.285

6 由良君美『荒野の告知 —コウルリッジ『クリスタベル』の祭祀主題—』1966年のpp.14-pp.15

7 S.T. Coleridge 枝村吉三編注『コウルリッジ詩集』旺史社1987年のp.179の説明では、Christabel には 'lovely', 'sweet', 'holy', 'gentle', 'beautiful' といった形容詞が用いられている。一方, Geraldine には, 'beautiful', 'bright', 'fair', 'lofty', 'forlorn' が採用されている。

8 Nethercot, p.206

9 J.B. Beer, *Coleridge the Visionary* (London, 1959), p.189

10 齋藤勇, p.47 の注釈

11 齋藤勇, p.48 の注釈

12 テキスト p.55

13 Nethercot, p.28 に『クリスタベル』は「英語で書かれた最も卑猥な詩」と批評されたと記録がある。また、由良君美, p.29 でも性交のイメージを喚起させると指摘されている。

Bibliography

Beer, J.B. *Coleridge's Poetic Intelligence*. London: Macmillan, 1977.

---. *Coleridge the Visionary*. London: Chatto & Windus, 1959.

Gillman, James. *The Life of Samuel Taylor Coleridge*. London: William Pickering, 1838.

Halmi, Nicholas, ed, Paul Magnuson. 2nd ed, Raimonda Modiano 3rd ed. *Coleridge's Poetry and Prose*. New York: W.W. Norton & Company, 2004.

Jackson, H.J. ed. *Samuel Taylor Coleridge: The Major Works including Biographia Literaria*. New York: Oxford, 1985.

Nethercot, Arthur H. *The Road to Tryermaine: A Study of the History, Background, and Purposes of Coleridge's "Christabel."* New York: Russell & Russell, 1962.

桂田利吉・岡村由美子・高山信雄訳『ジャイムズ・ギルマン著 コウルリッジの生涯』こびあん書房1992年

上島建吉編『対訳 コウルリッジ詩集 イギリス詩人選(7)』岩波書店2002年

S.T. Coleridge 枝村吉三編注『コウルリッジ詩集』旺史社1987年

S.T. COLERIDGE 齋藤勇注釈『研究社小英文叢書(14) CHRISTABEL』研究社1930年
高山信雄『法政大学教養学部紀要 通巻第四十五号 コウルリッジの幻想詩の構造と解(2)
—「クリスタベル」における対立と調和—』外国語学・外国文学編1983年

床尾辰男『コウルリッジの詩を読む 府・原詩と注釈』あぼろん社 2004 年
野村孝司『詩人コウルリッジ研究』晃学出版 2008 年
藤井佳子『コウルリッジと「他者」一詩に描かれた家族一』英宝社 2006 年
松島正一『イギリス・ロマン主義事典』北星堂 1995 年
山田豊『失意の詩人コウルリッジ—錨地なき航海—』山口書店 1991 年
由良君美『外国文学研究紀要 第 14 卷 第 2 号 荒野の告知 —コウルリッジ『クリスタベル』の祭祀主題—』東京大学教養学部外国科編 1966 年